

Monthly

アフリカ

Now

Vol. 1 2

NGO小冊子で

アフリカ理解を

携帯電話の基地局などをメンテナンスするエリクソン東芝通信システムの中野智之（さとし）さん（38）の写真。彼は、アフリカで活動する日本のNGO（非政府組織）を紹介する小冊子をまとめた。「NGOやアフリカの人を等身大で知ることができる内容だと思っています」

「普通のサラリーマンだった」が、三十歳の時、途上国とのかかわりを求めて青年海外協力隊に応募した。エチオピアへ赴任が決まり、アフリ

カとの縁が始まった。

「現地の家庭に住まわせてもらったり、地方に足を運んだりしながら、様々な人と接することができました。厳しい生活の中にありながら、豊かな知恵や明るい表情を持ったエチオピア人の姿は今でも忘れられません」

九月には、民族紛争のあったルワンダを訪ね、日本のNGOがどのように支援できるかを見てきたいという。「アフリカを、もっと身近に感じたい」と思っています。小冊子の問い合わせは、アフリカ日本協議会（03-3383-3210）へ。



7/29 朝日新聞

ナイジェリア軍事政権、政治活動を解禁

1~2

シエラ・レオネの内戦と影響について

3

「解放から開発へ」報告

4~7

JANICのフランスの後援中止を求めるアピール

8

ナイロビはやっぱり素晴らしい

9~10

初めてのボランティア体験一線のサヘルにてー

11

簡単に出来るアフリカ料理講座

12

アフリカイベントガイド

13~14

お知らせ

15

1995年8月15日発行

発行責任者：吉田 昌夫

編集責任者：尾関 葉子

発行所：アフリカ日本協議会

東京都台東区東上野1-20-6丸幸ビル5F Tel:03-3833-3210 Fax:03-3835-3965



ナイジェリア軍事政権、政治活動を解禁

アジア経済研究所 望月克哉

民政移管挫折「2周年」

6月12日、無効とされた一昨年の大統領選挙から「2周年」にあたるこの日をアバチャ軍事政権は全土に厳戒態勢を敷いて迎えたが、選挙当時の大統領候補アビオラによる大デモンストレーションが行われた昨年とは異なり、平穏のうちに過ぎていったようである。FEDEROや「民主主義のためのキャンペーン(CD)」や「全国民主化連合(NADECO)」による政府批判は続いているものの、アビオラ本人の逮捕により抗議運動は核を失ったかに見える。民政移管の最後の段階で挫折したナイジェリアに明るい展望は開けるのだろうか。

世界ユース、「ゴール」ならず

アバチャ政権としては人気回復に加え経済面での沈滞ムードをふきとばす材料が必要であった。その起爆剤として期待されていたのが、3月に開催を予定していた17才以下のサッカー、第8回世界ユース選手権なのである。アメリカのプロ・バスケットボールで活躍するオラジュワンなど、欧米プロ・スポーツ界への選手輩出では名高いナイジェリアにあっても、サッカーは別格。前回のワールド・カップでも準優勝チームのブルガリアを破るなど、ナショナル・チームのめざましい戦いぶりはいまだ記憶に新しい。

ユース選手権はこうしたスター・プレイヤーの予備軍の活躍の舞台であり、若い世代ばかりでなく、国民全体の意気を高揚させる上からもまたとない機会であった。緊縮財政の中で、競技場ほか施設

整備には例外的に資金が配分されており、ナイジェリア・サッカー協会(NFA)を中心に国を挙げての準備が進んでいた。

ところが開催も間近にせまった今年2月、国際サッカー連盟(FIFA)はナイジェリアでの選手権開催は保健・衛生上の見地から認められないとの裁定を下した。アフリカ・サッカー連盟(CAF)などの猛反発により、一度は再検討扱いとなったものの、結局、開催期日を過ぎた3月半ばの段階で正式に中止となった。ナイジェリアの人々の落胆ぶりは同情に余りある。もっとも、やり場の無さという点では政府も国民と同様である。多大の見返りが期待された投資が水泡に帰した上に、面目まで失ったからである。

ユース選手権の中止決定をめぐってはさまざまな憶測が飛び交った。当初は諸施設ほか交通手段を含めたインフラの不備を指摘する声が大きかったが、しだいに運営母体に議論の矛先が向かい、ついには政府批判に行き着いた。選手権開催の権利剥奪は国際世論の反映であり、「よい政治」を行っていない軍事政権に対する国際社会の制裁、つまり民主化の遅滞がもたらした当然の帰結と見る向きもある。まさに後知恵ではあるが、後日こうした見方を裏付けるクーデタ未遂事件の存在が明らかにされたのだった。

クーデタ再び？

政府筋の発表によれば、この事件が発生したのは3月1日であった。当初、政府はこれをひた隠しにしていたが、ようやく10日になってクーデタ未遂事件があったことを公式に認めた。公表の遅れ

は、首謀者を出した陸軍内部の調査に時間を要したためと説明されているが、実際のところは政治的な背後関係をたどるのに手間取ったためと見られている。その証拠として同13日には、軍事政権批判を展開してきた元国家元首オバサンジョが拘禁され、その後も逮捕者は日を追って増えた。6月5日に開廷された軍事法廷には民間人5名を含む22名が出廷したが、7月半ばの段階でその数は50名を越えている。当局はオバサンジョのほかにも北部の有力政治家ヤルアドゥアも連座の疑いで拘束している。

国民の期待を集めるワールド・ユースの裏側で政府転覆を狙う分子が動いていたこともショックではあったが、代替開催地となったカタルで無血クーデタが成功するというのは何とも皮肉な符合である。しかも首尾よく政府を転覆したカタル新政権は国際的な承認を受け、他方クーデタを未遂でおさめたナイジェリアの軍事政権は国際的な批判に晒されることとなった。

高まる国際世論

他国の軍事政権同様、アバチャ政権に対する国際社会の見方は厳しい。イギリス、アメリカほか主要ドナー諸国が事実上の制裁措置として人道的支援を除く分野での援助を停止しているが、国際機関を含めてより具体的な事項につき申し入れを始めている。一昨年来、政府批判を続けてきたノーベル文学賞受賞者、シヨインカの出国をめぐるフランス政府の介入はいまだ記憶に新しいところだが、3月のオバサンジョの拘禁以来、この数は著しく増している。オバサンジョは民政移管を完遂した軍人国家元首として、あるいは南アの民主化をめぐる「賢人グループ」の一員として国際的に知名度が高い。またカーター元大統領、故福田元首

相などととも「OBサミット」のメンバーとしても知られ、5月に開催された同会合後にはオバサンジョ救済アピールが発せられている。これに続く形で、軍事法廷が審理を始めた6月以降、イギリス、アメリカ、国連ほかによるクーデタ関与容疑者への嘆願アピールが続々と発せられている。

もともと国際社会の圧力はこの事件にのみ集中しているわけではなく、従来よりアムネスティ・インターナショナルをはじめとする人権擁護団体はナイジェリア政府の人権抑圧に対する非難を繰り返してきた。とりわけ政治犯の取扱いや死刑執行数は具体的な項目としてたびたび取り沙汰されてきたところである。しかしながら国際的な非難にもかかわらず、この7月には武装強盗への見せしめとして大量処刑が行なわれるなど、政府側は頑なに強硬な態度を崩していない。

地下活動から表舞台へ

現在、最も懸念されるのは反政府活動が昂じてテロ行為に走る勢力が現れかねないことである。実際、5月末にはナイジェリア中部の都市で爆弾騒ぎがあった。市内のスタジアムで「家族支援プログラム」と銘打った生活改善運動のキャンペーンの最中に起こった事件で、参加者の中に犠牲者がでた。政府は同プログラムを全国で展開し、女性を中心に国民の支持を獲得しようともくろんでいる。機先をさがれた形の軍事政権はすぐさま行動を起こし、翌日には有力政治家をはじめ50名余を逮捕、威信回復に躍起となっている。6月末に政治活動が解禁されたことにより、政治に批判的な勢力も政治の表舞台に登場してくるだろう。これがガス抜きになるのか。さらなる過激化を招くのか、なお予断を許さない。

フォスター・ブラン発

シエラ・レオネの内戦と影響について

フォスター・ブラン
シエラ・レオネ総括事務局長
ウィニー・タイ

シエラ・レオネの内戦は、すでに4年半も続いています。これまで交戦は実質的には国の南東部と東部に限られていましたが、昨年の10月以来国中に拡大しています。そのため、フォスター・ブランの活動地域であるモヤンバ市や首都フリータウンのルーラル・ウェスタン地域での活動にも重大な影響を与えています。

1995年1月と3月の反政府軍による攻撃で、こうした地域に济むフォスター・ファミリーの多くが親族とともに難民キャンプや別の地域への避難を始めました。避難の途中で家族とはぐれてしまった子どもたちもたくさんいます。人々の流入で主要都市部は人口が急増し、首都のフリータウンの人口は、この一年未満で3倍に膨れあがって現在150万人にも上っています。フォスター・ブランの調査では、この中にモヤンバから避難してきた2700人のフォスター・チャイルドとその家族・親族、フリータウンのルーラル・ウェスタン地域からの3000人も含まれています。

ここ半年、フォスター・ブランはかなり困難な状況の下で子どもたちの救済活動を行ってきました。

マケニ市、首都フリータウンのアーバン・ウェスタン地域とルーラル・ウェスタン地域のおよそ半分の地域では交戦による直接被害はなく、通常のコミュニティをベースにした子どもたちの保健衛生や教育に重点を置いたプロジェクトを継続して行っています。また、職業訓練、母親のための小規模商業開発なども続けています。

一方、交戦のためにプロジェクトが一時中断している地域では、次のような活動を行っています。

- 1) 避難した子どもたち（フォスター・チャイルドを含む）へのできる限りの支援
- 2) 援助地域から避難したフォスター・チャイルドとその家族の所在確認
- 3) 現地職員の安全とフォスター・ブランの資産確保

人々の避難後1ヶ月以内の2月に、フォスター・チャイルドを含む2700人のモヤンバ市から逃れてきた子どもたち、またその親族13500人に対して、食糧（米、油、豆、魚）や、その他の生活必需品（鍋、マット、学用品、毛布、中古衣料）、状況に対処するための幾らかの現金を支給しました。また、4月にはルーラル・ウェスタン地域からフリータウンの中心部に避難してきたフォスター・チャイルド880人と4500人の親族にも同様の緊急援助が行われました。最近になって、フォスター・ブランが活動をしてきたモヤンバ市内のボトタイアマの町を訪問したところ、さらに884人のフォスター・チャイルドとその親族の所在を確認し、米、豆、油、毛布などの緊急援助物資が送られました。また、特別医療も必要に応じて行いました。

6月15日の時点では、ルーラル・ウェスタン地域とモヤンバ市の活動地域のフォスター・チャイルドのうち、それぞれ69%、61%に連絡を取ることができました。

フォスター・ブランが行っている緊急援助は、もちろんフォスター・チャイルドやその家族だけに限ったものではありません。

例えば、次のような活動も政府や自治体とともに行っています。

- a) フリータウン市当局と：避難民の市流入に伴い増加するストリート・チルドレンのための施設設置
- b) 厚生省と：フリータウンの人口密集地域およびいくつかの避難民キャンプにおける衛生状況の改善とコレラ対策
- c) 文部省と：フリータウンに避難してきた子どもたち3500人対象の学校設立

現在フォスター・ブランは、保護者のいない何千という子どもたちが家族と再会できるように、両親の消息を調査するプログラムを社会事業省と協力して行っています。

まだまだすべきことは数多くありますが、シエラ・レオネの子どもたちの生活状況を向上させるというフォスター・ブランの目標を実現させるための努力は現地の方々から感謝されています。今後も、親族とはぐれた子どもたちの家族との再会、またフォスター・チャイルドの所在確認、避難民となった子どもたちへの支援など、できる限りの援助活動が続けていくつもりです。

こうした活動を可能にしている、各国のフォスター・ペアレントに心から感謝いたします。

解放から開発へ

＜新生南アフリカの農村の未来は！？＞

去る7月19日、中央労政会館第2会議室にて日本国際ボランティアセンター及びアフリカ日本協議会の共同主催で、『解放から開発へ』というテーマで、南アフリカの農村の現状と課題に関する講演会が行われた。講師は1992年から日本国際ボランティアセンター（JVC）の駐在員として、東ケープ州旧トランスカイホームランド地域にあるイシナンバ地域開発センターへの支援活動を行っている高梨直樹氏及び93年から95年4月までの2年間ヨハネスブルグのヴィッツ大学客員研究員として民主化への移行期における南アフリカの政治経済情勢を調査してきたアジア経済研究所の平野克巳氏であった。以下はその報告である。

最初に高梨氏の方からスライドを交えて南アフリカの主に農村地域の現状、及びJVCの活動等についての報告があった。高梨氏の講演の要旨は次の通りである。

JVCがこれまで農村開発を柱に活動を行ってきたが、それは13%の辺境の地に全人口の70%以上を占める黒人を押し込めるアパルトヘイトの問題がホームランドの農村において集積しているからである。そうしたホームランドの1つ、トランスカイで農村社会の再建に力を注いでいたノゾグラ・マギダさんとの出会いがきっかけとなって、JVCは3年前にマギダさんが代表を務めるイシナンバ地域開発センターへの支援を開始した。イシナンバ地域開発センターの活動は、村人に対する教育と訓練であり、村人が技術を持つことで自信を持ち、自分自身の可能性に気づくとともに、身につけた技術を使って協同組合活動を立ち上げ、村の中で経済的にも自立できるようになるといった方向性を目指した意識化のプログラムである。

また、今年度からジンギサ教育センターに対する支援も開始した。ジンギサ教育センターは黒人意識運動が生まれた東ケープ州のキング・ウィリアムズタウンにおいてスティーブ・ビコが1975年に設立したギンズバーグ教育基金が発展して1979年に発足された。そのセンターでは、子供の奨学

金活動、子供の文化活動、大人の識字教室や組合活動などを行っている。同センターでは1993年から地域住民が主体的に地域の生活改善・開発に取り組んでいけるようになるための「住民参加計画と行動」というアプローチをとり、生活改善指導員のトレーニングなどのプログラムを行っている。

次に、トランスカイを中心に南アフリカの農村における現状について述べる。トランスカイを始め多くの南アフリカの農村では収入を得る方法がないことから、男性が都市に出稼ぎに出かけるケースが非常に多い。トランスカイでも村に残っている人々の多くは女性か子供である。イシナンバ地域開発センターではそうした残された女性達や若者に対する支援活動を行っている。若者に対する活動では、夏休みの間10日間ほど合宿形式で技術訓練を行うサマースクールや、そこで得た技術を使って学校の中に菜園を作る活動、ユースグループを作って合唱などで競い合う活動等を行っている。また、女性達もイシナンバ地域開発センターで裁縫の技術を学んだ後、自分たちで組合を作り活動をしている。一方、村の上層部においても、各村の代表者が村の様々な問題点やその解決策などについて話し合うワークショップを行い、併せて保健衛生についての訓練も行っている。そうした訓練は技術訓練を受けた後、各村に派遣されているヘルスワーカーによって行われている。また、

職業訓練も行われており、ろうそく作りや、マット作り、養鶏、また野焼きという土器作りなどの指導も行われている。さらに、組合の予算書や計画書を自分たちで作れるような訓練も行われている。

また、ある村では11人の女性が2ヘクタールほどの土地を借りて、共同菜園を耕している。その村では今年の2月に日本から農業技術者を招いて有機農業についての訓練コースを行った。

JVCはイシナンバ地域開発センターに対する支援の1つに、他の国の様々な団体との交流があるが、マギダさんを招いて女性会議に参加したり、農業技術者をタイの農業トレーニングに参加するのを支援したり、ケニアの有機農業協会でのトレーニングにスタッフを送ったりしている。

次に、ジンギサ教育プロジェクトについて簡単に触れる。このプロジェクトでは生活改善普及員と呼ばれる村のリーダーを養成するトレーニングを行っており、プログラムを行う際の住民の組織化の方法や村人のニーズの発掘の仕方などを指導している。

以上、JVCの活動の概要を説明した。続いて、3年間の活動の成果と失敗について、まとめてみたい。

まず、成果について以下の点が挙げられる。

- 訓練やワークショップに参加した村人が、訓練で得た技術を使って、保健婦として働いたり、組合を作って生産活動を行い収入を向上させたりしている。
- イシナンバの実践教育（技術訓練）を取り入れている学校がある。
- 環境を壊さない生態系農業の重要性和その基礎的な方法についての認識を動機づけた。

失敗した点として以下の点が挙げられる。

- 組合活動をビジネスとして回転させていくための経験、発想、方法がな

く、定量的（統計的）な目標設定と評価を行ってこなかった。

- スタッフに十分な技術（裁縫、農業その他）がなく、それを向上させるためのトレーニングも行ってこなかったため、技術訓練が低いレベルに留まり、技術的な向上がほとんど見られなかった。

また、JVCが活動の中で、いくつか組合活動の限界にぶち当たった。その内のいくつかを述べる。

- 農村に経済力がなく、人々の購買力もないため、組合で生産したものが売れない。
- 産業基盤としてのインフラストラクチャー（道路、電気、電話、水道など）がほとんどない。
- 組合活動の参加者のほとんどが日々の生活（食事の支度、水くみ、畑仕事、洗濯など）女性であり、組合活動に集中することができない。

最後に、95年度からの目標を述べる。

- 組合活動としては、市場調査と売り上げ目標、生産目標、収支計画、セイビングなど、具体的なビジネスプランを立てながら活動していけるように動機づけていく。
- 生態系農業のトレーニングをフォローアップしながら実験モデル農場作りを行う。

高梨氏の報告の後、平野氏から統計資料を基に南アフリカの農村の現状、及びその問題点についての報告があった。以下はその概要である。

まず、南アフリカ共和国にどれだけ農民がいるのか、ということについて話をしたい。南アフリカの人口分布は「人口統計学上の非常に醜い怪物」と呼ばれ、非常に歪んでいることで有名である。

まず分布図で注目すべき点は旧ホームランドのトランスカイで男女の比が

男性42%、女性58%である一方で、白人達の居住区である南ア4州では逆に男性55%、女性45%になっている点である。このように男女の比が歪んで分布しているのが南アフリカの特徴である。特に、トランスカイと同じく旧ホームランドのベンダで顕著で、20歳から64歳までで見ると、その7割が女性である。

ホームランドにおいて男性の数が圧倒的に少ない1番の原因は、今や南アフリカの経済力を支えていると言われる出稼ぎである。その多くは鉱山等に働きに行く男性であるが、都市部にメイドとして働く女性も非常に多い。

次に、南アフリカにおける農村人口について触れよう。旧ホームランドでは60%の人が、また南アフリカ全体では58%の人が農村に住んでいると言われている。人口密度において男女比と同様な歪んだ状態が見られ、4つのホームランドのうち3つまでが1平方キロに70人という値になっている一方で、その他の地域（非独立ホームランド及び南ア4州）では27.5人になっている。こうした結果から言えることは、黒人が国土の14%のホームランドに押し込まれているということである。

一方、南アフリカにはその他に、6万7千世帯ある白人農家で働いているアフリカ人が80万人いると言われている。つまり、南アフリカにはホームランドに滞留している貧困層と、白人居住区の農場に働く黒人と言う2種類の黒人農業労働者がいるということである。双方ともにその収入は都市労働者の5分の1に過ぎず、極めて低所得、低賃金の状態に置かれている。

そうしたホームランドの1つ、JVCが活動するトランスカイというホームランドについてその特徴について触れよう。

トランスカイはホームランドの中において最大の面積を持っており、5万5千平方キロであり、第1号のホームランドである。1976年に独立した。

トランスカイの人口分布で特筆すべき点は、その都市化率の低さである。トランスカイには主だった産業がなく、同じく都市化率が低いヴェンダとともに、鉱山があるボブタツワナホームランドや、ケープタウンに近く製造業が発達しているシスカイホームランドと好対照になっている。

トランスカイは一般的に放牧地であると言われている。トランスカイだけでホームランド全体の75%の羊を有している。つまり、主要な産業は放牧と言うことになる。また、農業では非常に低収入であるメイズを軸とした混作を行っている。

次にホームランドの農村の住民は一体どこから所得を得ているか、と言うテーマについて話をしたい。

先に結論を言えば、ホームランドの農村は農業を営んでいない、ということである。実際、ホームランドの農村部での所得の6割以上は出稼ぎ労働者からの送金である。また、それに加え、農村に隣接している工場への通勤労働者の賃金を加えると全体の所得の90%以上は賃金所得である。

では、出稼ぎ労働者は一体何人いるのか、と言うことが問題だが、フィールド調査の結果によると1世帯当たり2名前後が出稼ぎで出ていると考えられる。

さて、以上述べたホームランドの農村とは好対照に、先程述べた6万7千世帯いると言われている白人農家で生産される農作物は、世界的に評価が高く、ECとどのような形で貿易関係を結ぶかということが議論されるほどである。フランスなどは南アの製品が自国の製品とバッティングする可能性があるため、南アに対して脅威を感じているほどである。こうした背景には鉱山で得た収入を白人農家に配分した南アの農業政策があると考えられる。

次に、こうした大規模農家の一方で、南アフリカには推定で50万世帯の小規模農家に対する最近の動きについて見ていこう。

前述したように、白人の商業農家以外の農場では、農業収入は極めて少ない。実際、小規模農家の0.2%しか農作物を売って収入を得ていない現実がある。平均の耕作地は2ヘクタールしかなく、生産性は白人商業農家と比べ、メイズで半分、豆類で5分の1と非常に低い。

そうした小規模農業に対する現政権の農業政策について述べる。

現政権についているANCは、政権に就く前に出されたガイドラインでは、他産業とのバランスを持った農業の重要性を唱えていたが、RDP以降は経済重視の政策に傾きつつある。ANCの農業政策には二面性がある。1つには農業における労働力吸収力に注目し、積極的な投資を行うとともに、規制緩和によって民間の農家の活力引き出ししていく一方で、貧困対策として農業に力を入れるのがANCの農業政策である。

また、農業政策と併せて重要なのが土地政策である。ANCの現在の土地政策は、90年代初頭に発生した干ばつで被害を受け、借金漬けになっている白人の商業農家を整理し、その農地を優良な企業に手渡して、農村にいる失業者を吸収してもらう一方で、強制移住させられた黒人のコミュニティにも土地の分配を行うというものである。

さて、今後の農村における動きについて考えてみたい。

まず、触れなければいけないのは大規模な人口移動である。土地が分配されることによる農村間での人口移動だけでなく、これまで産業がなかったトランスカイ、ベンダに開発が進むことにより都市が加速され、農村から都市へとといった人口移動も考えられる。その際重要なのは、労働者人口の60%が女性であるというトランスカイやベンダにおいて、家族が破壊されている現実である。そうした破壊された家族を復権することが大きな課題となっている。そのための1つの方法として都市部に低コスト家屋を建設する動きが

ある。

しかし、最も重要なのは、農村部において小規模の農家に所得の機会を提供することである。ここでは、そうした動きの1つ、ESP（小農支援プログラム）を紹介したい。これは、南部アフリカ開発銀行による技術指導を中心とした農業開発である。その成果で最もいい例がサトウキビの委託栽培である。現在4万人の労働者が20万トンの砂糖キビを生産している。この20万トンは南アの全生産量の1割に相当する。

以上、南アフリカの農業について説明したが、今後の南アフリカの農業を発展させる上で、重要なのは前述した「家族の復権」であること、そのための活動をNGOと協力して行うことであることを最後に強調したい。

南アフリカにおけるアフリカ人の人口分布 (1991年、千人)

	男	女	合計	都市化率	農村人口	人口密度
トランスカイ	1292	1812	3104	11.7%	2741	71.1
(%)	42	58	-			
20-64才	304	131	1035			
(%)	23	71	33			
ボプタタ	894	1027	1921	68.8% ¹⁾	580	47.9
(%)	47	53	-			
20-64才	364	451	815			
(%)	45	55	42			
グレング	218	307	525	17.1%	435	71.1
(%)	42	58	-			
20-64才	55	130	185			
(%)	30	70	35			
ヌル	362	441	803	84.7% ²⁾	123	97.6
(%)	45	55	-			
20-64才	128	181	315			
(%)	41	59	39			
小計	2766	3587	6353		3879	
(%)	43	56	-		51	
非独立8-65才	4910	5820	10730	16.3%	8981	27.5
(%)	45	54	-			
南ア4州	5970	4960	10930	70%	3279	
(%)	55	45	-			
総合計	13646	14367	28013		16139	
(%)	49	51	100		58	

1) 鉱業寄与率 45.3%

2) 製造業寄与率 27.1%

NGO活動推進センターの

フランスの核実験中止を求めるアピールに呼びかけ団体として参加しています。

去る7月13日、NGO活動推進センター(JANIC)よりフランスの核実験に抗議する市民アピールへ呼びかけ団体として参加しないかとの打診があり、運営委員内で検討した結果、参加することになりました。8月1日現在、次の103の団体が呼びかけ団体になっています。

アフリカ日本協議会/NGO活動推進センター/関西NGO協議会(27団体)/京都NGO協議会(14団体)/名古屋NGOセンター/南北ネットワーク岡山(15団体)/広島NGO連絡会(6団体)/福岡NGOネットワーク(13団体)/アジア協会アジア友の会/アジアキリスト教教育基金/アジア民間交流ぐるーぷ/ウハノッカ友の会/幼い難民を考える会/国際子ども権利センター/国際民間援護協議会「メコン基金」/シェア=国際保健協力市民の会/世界の子どもと手をつなぐ会/曹洞宗国際ボランティア会/地球市民の会/地球緑化の会/燈台(アフガン難民救援協力会)/東方科学技術協力会/西アフリカ農村自立協力会/日本国際飢餓対策機構/日本国際ボランティアセンター/日本国際交流センター/日本ハンガー・プロジェクト/BAC仏教救援センター/東京東チモール協会/ヒマラヤ保全協会/熱帯森林保護団体/緑のサヘル/ラオスの子供に絵本を送る会

市民アピールの呼びかけ文です。会員の皆さまもご協力いただければ幸いです。

市民の皆さんへ

フランスの核実験にフランス製品不買運動で抗議しよう

フランス政府は今秋から太平洋で一連の核実験を行うと発表しました。他国にならって日本の政府も抗議しましたが、その内容は及び腰で、平和を望む私たち国民の意思を反映したものとは言えません。現在の核爆弾は広島型原爆の数千倍の破壊力を持っていると言われていいます。フランス政府は、核実験に国連の専門家が立ち会うから安全だと主張していますが、安全な核実験などありません。核兵器は生物を破滅させ、環境を汚染し、その悪影響は半永久的に残ります。

かりにフランスが核実験を繰り返すと、他の保有国も連鎖的に核実験を始める恐れがあります。

ニュージーランドやオーストラリア市民による激しい反対運動が連日テレビで報道されていますが、唯一の被爆国、日本の私たちこそ立ち上がらなくてはなりません。フランスが核実験を取り止めるまで、フランス製品を買うことを差し控えるよう提案します。こうした具体的な形でフランスの人たちに私たちの意志を伝えたいと思います。フランス市民も必ず私たちの運動を理解し支持してくれると確信します。また、核実験場の近くで、生命の脅威にさらされ続ける南太平洋の小さな島々の人々に私たちの連帯の意志を伝え、これら住民の人たちの生活および自然環境を守る運動を支援していきたいと考えます。

皆さんも、フランスが核実験を中止するよう、各々で行動を起こして下さい。フランスの知人、友人に手紙を送り、あなたの考えを伝えて下さい。そしてフランス政府を代表しているフランス駐日大使にあなたの抗議の手紙を送って下さい。日本語で結構です。送り先は以下の通りです。

〒106 東京都港区南麻布4-11-44 フランス大使館
ジャン・ベルナール・ウーブリュー大使殿
(Mr. Jean-Bernard OUVRIEU)

ナイロビはやっぱり楽しい

運営委員 本田真智子

今、ケニアに来ています。今回の目的は夏休みの旅行です。ということでした。たことはしていません。私より1週間以上も先に渡ケニアした尾関事務局長は砂漠化防止条約第7回政府間交渉(Seventh INCN Negotiating Session)に出席しています。また、2人で日本の政府機関と日本のNGOの官民協力を視野に入れたネットワーク「ケニア・ODA・NGOネットワーク(JAPANESE ODA・NGO NETWORK IN KENYA)」の第3回ミーティングに出席しました。この報告は次の会報で行います。

今回は私のお粗末なナイロビ滞在記をお届けします。

今、ナイロビの日本人の口にのぼる一番の話題はやはり「日本人学校の校長浅野氏の射殺事件」。治安の悪化が懸念されるナイロビの日本人社会に衝撃が走った。

3年前にナイロビに来たときはマタトゥ(乗合バス)で移動していたが、今回は一度も乗っていない。「乗るときは時計やサイフ、ピアスを置いておけ」とアドバイスを頂いた。こちらに住む日本人の友人に「以前はマタトゥに乗っても何も云わなかった人が、今回は注意したのよ。やっぱり、ナイロビって治安が悪くなっているのねえ～」と云ったところ「治安は変わっていない。3年前マタトゥに乗っていたのが危なかったのよ」と返された。そっか！でもやはり10年前に比べれば格段悪くなっているという。

ナイロビやケニアについては、経済のこと、政治のこと、様々に言われているが、私は専門家でもないし、そういったことを調査に来たわけでもない。それについてあれこれ述べない。

ただ一つ、こちらにきて感じた、たむろっている成年男子が3年前より増

えたということは記しておく。失業者かどうかは判らないけど。周辺部分の経済や環境が悪くなって、都市の人口が増え、結果的にたむろっている人々が多くなったのかもしれない。でも、あくまで推測。

マイナス部分だけは書きたくないので、楽しいことも。

ケニアODA・NGOネットワークのメンバーである、セラムキーワークショップにほんの短い時間だけど寄せて頂いた。

滞在ホテルのSilver Springs Hotelからタクシーで800ケニアシリング(ディスカウント交渉はしていない)払って、Safari Park Hotelへ。そこで代表者の堀内主鏡子(Horiuchi Sumiko)さんとピーターさんが迎えに来て下さり、さらに車で約10分。ナイロビ市内から車で約20分のカハワに、セラムキーワークショップがある。

ここでは15名の知的・身体障害者と、6名のスタッフがいて、アクセサリや家具作りを行っている。

私がアクセサリーの作業場に入り「ジャンボ」と挨拶したところ、返事

はあったが、彼らは作業の手を休めなかった。

アクセサリーの材料の粘土をこね、窯に入れる段階の様々な形を作っている人は、その道のエキスパートと云っていいかもしれない。

デザインはスタッフが考えるというが、彼らはそれを器用に仕上げていく。またビーズなどを購入し、それをつないだアクセサリーも作っている。報酬は出来高。また、身体障害者のため細かい作業ができない人は、土を整える役割を担い、作業に応じた収入を得ている。

隣の家具作りの作業場は5人の男性が働いていた。家具は注文生産で、現在はほとんどが口コミによつての受注だ。丁度ドレッサーを作っていて、やすりをかけ、水色の化粧版を貼っていた。これから鏡をつけるのだとデザインを担当した男性は語った。

日本でも知的障害者の社会参加の仕事をされていた代表の堀内さんは、1991年からこのプロジェクトの準備を始めた。施設をオープンしたのは1993年3月。ナイロビでは障害者の教育や社会参加のための施設やプログラムが遅れているため、その一つの礎になればとセラムキーを作ったという。

セラムキーはセラミックをもじってつけたという。きっとスワヒリ語なんだろうと思っていた私は、大笑い。でも、たしかにセラミックを社会参加の一つの手段にしているので、名にいつわりなしてとこか。

優秀でまじめなスタッフと作業員がいて、ここ2年くらいから少しずつ運営システムやアクセサリーの品質が良くなってきたという。代表の堀内さんはなかなか魅力的な方（私の在ケニア

日本人の友人も彼女をととても好いている）で、お会いできて嬉しかった。この作業所、セラムキーワークショップの紹介は後日きちんとやるつもり。お楽しみに。

さて、セラムキーではネックレスやイヤリング、ピアス、木彫りの人形などを作っている。きちんとしたものを作りたいという堀内さんの言葉通り、ディスプレイルームに入ったとたん、買い占めたいと思うすてきなアクセサリーばかりが下がっていた。そして心の中で、「ちえっ、市内のお土産屋で買うんじゃないか」と呟いた。

セラムキーのアクセサリーは少しだが事務局を通して国際協力フェスティバルなどで販売する予定。また、ナイロビに行く予定の方は、ぜひセラムキーのアクセサリーなどをお土産の一部に加えて欲しい。

私はこちらに来て、嬉しくてニヤニヤしている。堀内さんにも嬉しそうな顔をしていると云われた。親切なケニア人にしか会っていないし、セラムキーの堀内さんや、ACTSの石渡さん、少年ケニアの友の岸田さん、八木さんご夫妻、獣医氏の神部さん、私の友人達に会え、精神的にとっても元気になった（ねむいけど）。

INCEDの会議に出席したところ、2月の「沙漠化と取り組む」のゲスト、マリのスレイマン・ダンベレ氏に会うことができた。「いつマリに来るのか」聞かれ、少し困る。私はいつマリや西アフリカに行くことができるのかと、ナイロビの空を見上げ考えた。

初めてのボランティア体験—緑のサヘルにて—

緑のサヘルボランティア中畑朋子

現在全国縦断サイクルキャンペーン中の緑のサヘル（スケジュール等はイベントガイドのページをご覧ください）。事務局で留守番役を務めるボランティアの中畑さんに初めてボランティアとして活動した感想を書いていただきました。協議会でも、特にイベント（引越、国際協力フェスティバル、上智大学ソフィア祭、シンポジウム企画等）はボランティアの参加なしではとても成り立ちません（実はボランティアをして下さる方はとても少なく、いつも同じ方をお願いすることになってしまっているのですが）。皆さんもお時間がありましたら、是非。

海外での援助活動には、以前から興味がありました。にもかかわらず、これまでこれといった積極的な働きかけはしてきませんでした。あまりにも多い組織の数と活動の多様性から、何をどうしてよいかわからず、手を出せないでいたというのが第一の理由です。けれど、それより硬く私の心と体を閉じこめていたのが、実際に身近にある日本国内の問題、身内の問題を先に考えるべきではないかという、見えない殻のようなものでした。

小さな偶然が重なって、「緑のサヘル」でお手伝いができることになったのはラッキーでした。アフリカへは行ったこともなく、報告会に何度か出席した程度の私で務まるのだろうかという不安はあったものの、初めてのボランティア体験に、かなり高揚した始まりとなりました。

「会員倍增日本列島縦断サイクルキャンペーン」の期間中ということで、沢山の方からのお電話を受けました。淡々と思いを語られる方、エネルギーに協力を申し出て下さる方、何故か威圧的な態度の方。損得の仕事では得られないおもしろさがあります（10年以上、一般企業にいた私にはとても新鮮なことでした）。

ご自分のまわりで乱開発が進み、また、開発派からのいじめによって、いたたまれない毎日を送って

いるというお電話がありました。

「だからこそ、遠い国とはいえ、あなた達の活動に協力できたらと思ってね。つながっていることだね。」その言葉に、私ができることといったら、こちらからもエールを送ることだけでした。

「苦しい状況に置かれているから、他人の心、痛みがわかる」、絵空事のように感じていたそんなフレーズが頭に浮かび、本当にありがたいと思いました。

直接現場で働くのが一番大変なことだけれど、新聞記事を読んで連絡を下さるというのも、何もできずにいた私からすると大きな行動に見えます。できることがあれば何かしたいと考えている人たち。声だけしかわからない相手に親近感を感じ、想像はふくらんでゆきます。

働いてみて、硬かった殻が割れつつあります。地球上のどの地域の問題であろうと、自分にとって一番手をのばしやすい（偶然でもかまわない）ことが、『身近にある』ことなのだと気づきました。すべてはつながっているのですから。私にとってはそれが「緑のサヘル」だったわけです。

ただ、もう少し踏み込んで取り組んでいくには覚悟がいるなと思いました。これもまた、自分にくった新たな殻かもしれませんが。しばらくは流れにまかせて、ボランティアを続けてみたいと考えています。

アフリカ料理の頁

今月は『緑のサヘル』の現地スタッフであり、協議会にも設立当時から関わる坂井真紀子さんに、かつて滞在経験のあるスワジランドのおやつを紹介していただきます。

スワジランドのおやつ “シ・トゥ・トゥ”

私は以前、2ヶ月ほどスワジランドの家庭に居候したことがあります。この地方ではコーンミールを使った主食のバリエーションがたくさんあり、毎日飽きることがありません。今回は、ローカルの甘くないすいか（リジョティ）とコーンミールのおやつです。私のお世話になった家庭は子供が常に10人以上いて、おかあさんはバケツのような大鍋でシトゥトゥを作ります。子供達はプラスチックのお皿を持ってわいわいがやがや。食べ始めると静かになるのは万国共通です。あつあつのシトゥトゥに冷たい牛乳と砂糖をかけてどうぞ。

材料：

コーンミール

冬瓜1個（スワジランドではリジョティというローカルの甘くないすいかを使いますが、日本ではこれが一番近いのではないかしら。）

牛乳（お好きなだけ）

砂糖もしくははちみつ（お好みの量で）

私は、バケツ大の鍋でしか作ったことがなく、しかもどんぶり勘定でした。正確な量が見当つきません。ごめんなさい。

作り方：

- ① 冬瓜1個を、皮と種を丁寧に取り、適当な大きさにスライスする。
- ② 深い鍋を用意し、冬瓜を入れフタをして弱火にかけ、水分がでてくるのを待つ。
- ③ ぐつぐつしてきたら、柄の長いへらでよくかき混ぜてとろとろにする。
- ④ ③に少しづつコーンミールを振り入れ、底の方からよくかき混ぜる。だまにならないように少しづつ混ぜ込むのがこつ。
- ⑤ しばらく弱火で粉を加えつつ、一生懸命練る。
- ⑥ へらですくってみて、感触がぼたつてきたらOK。フタをしてよく蒸らす。
- ⑦ 皿によそい、冷たい牛乳と砂糖（はちみつ）をお好みでかけてスプーンでべちゃべちゃと混ぜながら食べてください。

アフリカイベントガイド

関西・中国

アフリカ理解講座（全6回）

アフリカは遠いか

～南アフリカに暮らして

第6回「南アフリカのアフアーマティブアクション」

講師 篠原収（広島女学院大学助教授）

9月17日（日）午後3時～

会場 広島国際センター

（中区中町クリスタルプラザ6階）

問い合わせ 広島アフリカ講座

電話 082-211-2441

前田春人写真展

「厳しさの中で・南アフリカ」

8月22日（火）午後5時～

アステールプラザ大ホールロビー

23日（水）～29日（火）

JTインフォ・プラザ広島3階

問い合わせ 広島アフリカ講座（上記）

講演「南アフリカを旅して」前田春人
と

ライブ「アフリカン・パーカッション」

8月27日（日）午後2時～

会場 JTインフォ・プラザ広島1階

問い合わせ 広島アフリカ講座（上記）

マハラティーニ&

マホテラ・クィーンズ 広島講演

8月22日（火）午後7時～

会場 アステールプラザ大ホール

前売 3500円 当日 4000円

（小学生以下無料）

問い合わせ OTIS! 082-249-3885

ピノカートンズ・スーク 082-227-1970

関東

河野祐治 写真展（アフリカの動物他）

8月1日（火）～30日（水）

（21、28日は休み）

会場・問い合わせ バオバブ

電話 03-5685-6648

第11回緑のサヘル帰国報告会

石山 俊/坂井 真紀子

8月25日（金）午後6時半～

会場 江東区文化センター3階

第3研修室

問い合わせ 緑のサヘル

電話 03-5632-3029（高橋・本所）

ライブ「アフリカンナイト」

8月26日（土）午後7時半～

出演 オランド（ガーナ）

当日 1500円

9月9日（土）午後7時半～

出演 ラティール（セネガル）

当日 1500円

問い合わせ バオバブ（上記）

文字は大陸を越えて

第22回聚華会書作展

併エチオピア交流展

日本語とエチオピア語を毛筆で作品化。

エチオピア人陶芸家T. ガライヤ氏の
作品展示もあります。

9/14（木）午後1時～5時

15（金）午前10時～午後3時

16（土）午前10時～午後5時

17（日）午前10時～午後3時

会場 JR津田沼駅南口正面

サンペデック4階ホール・ギャラリー

サイディア・フラハの会帰国報告会
「ケニアのストリートチルドレン」

荒川勝巳

9月17日(日)午後1時半～

会場 世田谷区立烏山区民センター

電話 03-3326-3511

フェスティバル **AFRICAN MUSIC FESTA**

ライブ、料理、ファッションショー、
マジックショー、写真展、ビデオショ
ー、おみやげ屋などなどアフリカ盛り
だくさんのフェスティバル!

9月23日(土)午後4時半～

会場 三茶シャレナードホール

(新玉川線三軒茶屋駅北口)

チャージ 3000円(1ドリンク)

スペシャルゲスト オスマン・サンコン

問い合わせ・チケット予約

アフリカ・プロモーション株式会社

電話 03-5814-2721

国際開発学会 **アフリカ** 分科会

93年10月のアフリカ開発会議、9

4年12月のアジア・アフリカ開発フ

ォーラム、95年7月の東南部アフリ

カ諸国とアセアン諸国事務次官レベル

政策担当者会議について報告を行い、

今後のアフリカ問題を展望する。

9月23日(土)午後1時半～

会場 (財)国際開発センター5階会

議室(江東区富岡2-8-11京福ビル)

ウォーマッド95横浜

～みなとみらい21フェスティバル～

9/14(木)前夜祭(時間未定)

会場 ライトマークプラザ1階ガーデンスクエア

9/15(金)・16(土)

ミュージシャンのパフォーマンス、ワ

ークショップ、フリーマーケット、フー

ド・ドリンクなどなどの自由空間。入

場無料!

会場 臨海パーク午後12時半～

出演 アリ・ファルカ・トゥーレ(マ
リ)、フランシス・ベペ(カメルーン)、
ハミッド・バルーディ(アルジェリア)

ほか

9/16(土)

会場 国立大ホール

(国立横浜国際会議場)

開演 午後5時～

出演 ザ・ブーム、アリ・ファルカ・
トゥーレ、金 石出

前売 4500円/4000円 5000円/4500円

問い合わせ ウォーマッド事務局(ソ
ー(株)内)03-3226-1991/KMミュー
ジック045-201-9999

中部

写真展「国境なき医師団」

8月15日(火)～29日(火)

会場 セントラルパークセントラルギャラリー

問い合わせ 052-961-6115

全国

緑のサヘル

「日本縦断サイクルキャンペーン」

緑のサヘルでは引き続き自転車チャリ
ティーツアーを敢行中。8月中の会場
は:

8/26(土)佐賀県鳥栖市民文化会館

29(火)熊本県水俣市が伊水俣

30(水)鹿児島県串木野市青年会議
所

9/4(月)屋久島(会場未定)

問い合わせ 緑のサヘル03-5632-3029

お知らせ

●シンポジウム

女性が担うコミュニティづくり (仮題)

を一緒に作りましょう

引き続き来年1月に企画しているシンポジウム、それにとまなうアフリカからのゲストのスピーカーズツアーやグループ交流などを一緒につくってくださる方を大募集しています。

●文集を売っています!

まだ、文集が事務局にたくさんあります。タイトルは「体験から協力へ〜アフリカで活動するNGOは今〜」です。定価は800円。会員の方は600円でおゆずりしています。購入方法は次の3つです。1) 事務局に直接お越しいただく。事務局に遊びに来がてら、どうぞ。途中で段ボールを拾ってきていただくと嬉しいです。2) チラシの申込用紙を郵便かFAXで事務局に送っていただく(電話でも大丈夫です)。郵便で本と代金の請求書、郵便振込用紙をお送りしますので受取後、郵便局か銀行で代金をお支払下さい。3) 協議会主催または共催のイベントに参加いただき、そこで販売している文集をお買い求めいただく。

みなさんのまわりでアフリカやNGOにご関心のある方がいらしたら、ぜひ! 宣伝をお願いいたします。中味もちゃんとつまっています(100ページ余りの充実版)。いまだ事務局では文集に囲まれて仕事をしています・・・

●事務局引っ越しに関わる! お願い!

前号と一緒に送りましたチラシでもお知らせしましたが、事務局が9月3日(日)に神田に移転します。8月の終わり、事務局長の帰国後一気に引っ越し準備に入ります。段ボールと人手がとて、必要です。あなたの手助けを

お待ちしております。8月28日(月)

~9月3日(日)のあいだで、自由な時間のある方! 事務局までお知らせ下さい。いつでも、何人でも、切実にお待ちしております。HELP!

●ボランティア募集のお知らせ

・引っ越しを助けて下さい! (上記)

お問い合わせは事務局篠崎まで。

・週に1回程度事務局で、新聞の切り抜きをして下さる方を募集しています。昼間でも、夜でもOK。アフリカのニュースを見逃さないチャンス。お問い合わせは事務局尾関まで。

・毎月の会報の発行を手伝って下さる方を募集しています。原稿入力、印刷、発送作業など。自宅でする原稿入力、月1回(15日前後の土曜日)事務局に集まって行う印刷・発送作業、お好みでご参加ください。お問い合わせは事務局本田(会報担当)まで。

・イベントボランティア募集! 9月30日(土)・10月1日(日)に日比谷公園で開催される国際協力フェスティバル、11月はじめの上智大学ソフィア祭に出店予定です。当日までの準備と当日お店番をして下さる方々を大募集。交代制ですので、お祭りの他の部分ももちろん、楽しめます。あなたのご都合のいい時間で結構です。お問い合わせは事務局篠崎まで。

編集後記

中野さん、遅い!

表紙の記事は市民フォーラム2001の鈴木氏の協力により得られました。感謝。小河原さん・三村さん・名畑さんもありがとう。編集長本田さんも海の向こうからダイワリを送って下さいました。やはりあなた無しでは。一体、この作業はいつ終わるのか? (byこうるさい娘)

大変でした。もう二度とやりたくない!(中野)